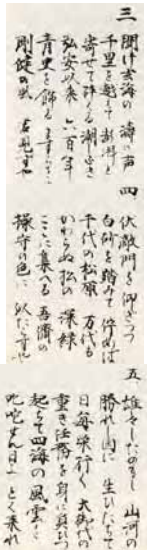
〝失われた校歌〟に想う
百周年に最後の斉唱を

麻生 昭（中学23回）



同窓会総会・懇親会で校歌斉唱があるが、福中卒にとって、後半部分が失われた、いわば中途半端な校歌で、歌い終わっても物足りなさが残り、後に続く折角のご馳走も消化不良気味、心も不完全燃焼で、いつも何となく残念無念の思いを抱いて会場を後にしている。

私たちの時代は、至誠・剛健・操守の校訓を中心に、福中生としての歓喜と将来への抱負を前後に従えた、均整のとれた風格ある五番までの校歌だった。春日原でのラグビー応援時は拍手と応援歌だけで、校歌は講堂でしか歌わなかったと記憶している。四大節（四方拝・紀元節・天長節・明治節）をはじめ、講話など全校生徒が集合した時に締めくくりにいつも歌われた。ピアノ伴奏もなく指揮者もいなかったので、どのように歌いだしたのか不思議でならない。

五番には、たまたま某先生の姓と同じ語句があって、そこへ行きつくと、待ってましたとばかり皆が必要以上のドラ声を張りあげ、その後ニヤニヤ顔になるのが常だったので特に思い出深い。先生はきっと針の蓆といった心地だったのではと想像すると、今でも申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

また何年か前、懇親会の当番幹事の皆さんのご配慮で、五番まで歌う機会を設けていただき感激したのだが、聞き覚えで自己流に歌ってきたせいか、節回しに少し違和感を覚える部分もあった。

※

戦後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）から皇室中心主義とか軍国主義との指弾を受けぬよう、先生方が自主規制で校歌について討議し、延命第一を考え抜かれた末の、あの一・二番に落ち着いたのだと思う。福高生はこれが校歌だと提示されたわけで、そのまま受け入れるしかなかったであろう。ただ、校歌についての思いを聞いてみたい気はする。

私が卒業した翌年に敗戦を迎えたから、五番までが校歌だったのは振り返ってみれば、長い校史の中の僅か四分の一の期間だったので、あまりこだわるのは見苦しいだろう。また、もし全く新しい校歌に変わっていたら、福中生は完全に蚊帳の外の存在になっていたと思うから、一部とはいえ皆と一緒に歌える幸せには感謝すべきだろう。

それでもなお、創立百周年の節目だからこそ、もし出席できたなら、福中生の十数名で最後の斉唱をし、今までの先輩方の無念さへ捧げるとともに、失われた校歌に別れを告げたい。それが私の偽らざる心境である。

◆編集部注◆校歌が初めて全校生によって歌われたのは『福中 福高七十年史』などによると、創立4年目の大正9（1920）年2月11日の紀元節の式典でのこと。生徒たちは校庭で練習を重ね、当日は未完成の校舎の一部だった倉庫で、先生のバイオリン（ピアノがなかった）に合わせて歌った、とある。

筑波の風に吹かれて
社会を眺める

清潔の中に潜む抑圧

野上 亮（高60回）

【清潔という至上の価値】

私たちが生きる現代社会で重視されるものの一つに、「清潔」があります。ちまたには抗菌グッズがあふれ、清潔な住環境が好まれますし、男女問わず異性には清潔感あふれる容姿を求めます。

清潔は生活だけでなく、社会一般においても求められます。とりわけ、政治ではそうです。政治家はこぞってクリーンな政治を標榜しますし、金権腐敗には厳しい目が注がれます。

【清潔と抑圧】

このように、現代社会において、清潔さは至上の価値を持つものとされるわけですが、果たして本当にそれだけなのでしょうか。どうやらそれだけでは終わらないようです。どういうことか。それは、清潔さという観念が何やら恐ろしいこともはらんでいるということです。

歴史の事実を見るとわかるように、清潔さが強調されるときというのは、清潔とともに実は抑圧もセットとなっています。

例えば、インドネシアのスハルト独裁政権下では、「パンチャシラ」精神という五原則が行動規範として国民に鼓吹されました。そこで強調されたのは、「清潔な国家権力」でした（小林、2005）。私たちは、抑圧というものを腐敗とともに想起しがちですが、実際の抑圧の場面においては、清潔という価値が強調されているのです。

【清潔と排除】

また、よくよく考えてみますと、清潔というものには排除の観念がまとわりついています。菌を取り除くことで清潔さが保たれるように、社会においても、異分子を排除することで、清潔さは保たれるわけです。歴史を思い起こせば、大虐殺という苛烈な抑圧は、清潔な政治を標榜する政権によって引き起こされる事例が多くあります（例ホロコースト）。

そう考えると、清潔さというものには時として抑圧や排除という恐ろしい価値観も有していることがわかります。

【「正しい」価値観に透徹した思考を】

だからといって、不潔が良いというわけではありません。そうではなくて、清潔さのような正しいとされる価値観の中にも良くないものが潜む、そういう側面を見逃してはならないのです。私たちが当たり前のように正しいと信じ込んでいる価値観に対し、透徹した思考を向けることが大切です。

私たちの先輩は、社会の中でそのような思考を、もろもろの圧力や権力に屈することなく貫いてきました。母校に流れるそうした精神を今一度再確認すること。これこそが同窓生の責務だと私は考えます。

野上 亮（のがみあきら）
1989年飯塚市生まれ、篠栗町育ち。篠栗町立篠栗中学校出身。創価大学文学部卒。現在、筑波大学大学院で社会学を専攻。趣味は読書、小説執筆。

参考論文

小林和夫「培養されたハビトゥスと『行政技術』という職能」『年報社会学論集』18号、2005年

☆☆編集後記②☆☆

◆建学100年、ノーベル賞に到達しました。組み合わせが、ユメのような気がしますが、その間には、卒業生の皆さまの多くのでき事が、凝縮されていることでしょう。さて、勉強・運動に、とりかゝらなきゃ。

（黒田義治・高7回）

◆大隅君おめでとう。「人のやらないことをやる」最高です。福高百年に高15回が花を添えることになり感無量。「基礎研究を大切に」と各所で強調されていて、日常に流される我が身に浸みる思いです。

（原口紘一・高15回）

◆本紙は紙媒体では最終号とのこと。一つの歴史が終る寂しさを感じます。ただし東京同窓会の広報活動を休止するわけではなく、むしろ時代の要求に対応すべく自ら変化に挑む発展的な休刊と考えています。Next one!

（古賀芳和・高29回）